
真っ黒なトナカイ

柿原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真つ黒なトナカイ

【Nコード】

N9452Z

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

Twitterで適当にツイートしたら思いの外反応がよかったので文章化した物語。
ブラックなクリスマスをあなたに。

私、サンタ。今からリア充をかつさらってくるの。

サンタって、子供にプレゼントを渡して帰る懐の深いおじいさんってイメージがあるけど、そうじゃないの。

誰も見たことがないはずなのに勝手に想像しちゃうなんて。

本当のサンタは私。懐も深くないしおじいさんでもない。ただのフリーター。もちろん彼氏はいない。

ただカップルにひがんでる訳ではない。ただリア充が羨ましいだけではない。

本気でこのビニールのゴミ袋の中に閉じ込めて痛い目を見せてやりたい。

今までされてきた屈辱ぶん、しっかり精算してもらおうわ。

私だって昔はクリスマスに恋人と共にイルミネーションを見に行けたらなああって夢見てた乙女だった。そりゃあ誰だってそうでしょ？ 純粹に、まだ見ぬ誰かを独り占めしたかった。でもその人はいつまで経っても私の前には現れなかった。周りのみんなは次々に結婚していくのに、私はまだ恋人さえいた試しがない。どうせ不細工だし、根暗だし、思い当たる節はいくつもあるけど。でも、それでも、こんな理不尽だ。

真っ赤なお鼻のトナカイさんはいつもみんなの笑いものだったよ。うだけど、私だってそうだった。いつもイジメられては隠れてないていた。泣き顔を見られたらあいつらの思う壺だと思っていた。そういうイジメっ子ばかり彼氏が何人も出来て、私には出来ないなんて、そんなのおかしい。笑われてもサンタに尽くしたトナカイみたいになりたくない。そんな思いで日々を過ごして早二十五年。もはやイジメっ子さえ私の周りにはいない。

そんななか、私はネットの世界と出会い、あるフレーズを目にし

た。

『リア充爆発しろ』

私はこの文字列をはじめて見た時、身震いした。なんて素直で効果的な言葉なのだろう。今の私の気持ちを一言で表してくれる唯一の言葉。心臓の中を冷や汗が滴るような刺激的でドキドキする言葉。開きっぱなしの口からダラッと流れていく涎を慌てて飲み込む。

これだ！ これだ！ これだ！

心のなかで何度も連呼する。目は血走っていただろうし、貧乏ゆすりも激しくなっていただろう。どうせ自分以外誰もいない暗い部屋。何したって見られない。そんな都合の良い自分だけの空間はいつしか湿った憎悪の巣となっていた。笑いものだったトナカイはいつしかサンタのように上から物を見るようになった。

ネットの中は自分の思い通りの世界だった。嫌なものがあれば即削除。自分の都合の良いようにしていても構わない唯一の世界。私はもう一人の自分が暴走しているのに気付きつつもコントロール出来なかった。

そうして迎えたクリスマス。街中浮かれた雰囲気でもんな馬鹿みたいに幸せそう。バイト先から早足で帰り、すぐにパソコンのスイッチを押す。いつもの私の世界がそこで帰りを待つてくれていた。薄暗い部屋の中で眩しく光るディスプレイ。どんなイルミネーションよりも輝いている。

そして私はネットで買ったコスチュームに身を包んだ。セクシーさのないサンタクロース。真っ黒のゴミ袋を肩に担いで。私は最後に自分自身に言い聞かせた。

私はサンタ。今からリア充をかつさらってくるの。

通りは小雨気味だった。ジメジメとした雨の香りは嫌いではない。視界の悪さも飲み込んでくれるから。夜更け過ぎには雪になるのだろうか。降るなら降るでビルを覆い隠すほど降ってしまった方がいいのに。人通りの少ない通りに似合わない私の格好。私も雪に埋ま

つてしまえば、と一瞬想像するも、この通り雨。濡れて寒さも倍増。目はうつろでもはやピントを合わせる気にもなれない。

とそこに、一組のカップルが現れた。正直、血が騒いだ。ついに実行に移すときが来たのだ。カップルが私の横を通りすぎていく。そのカップルの後ろを付いて行く。で、ゴミ袋をかぶせ、引きずって帰る。もうゾクゾクしてきた。私の前をカップルが通りすぎていく。早く。早く。早く行け。

「あれ？ 澄田じゃん」

私のことを呼ぶ男の声。

あれ？ もしかしてこのカップル、私の知り合い？

「ホントだ！ 久しぶりに見たあ」

カワイ子ぶる女も私の知り合い？ 嘘でしょ？

そして二人は私を置いて勝手に盛り上がっている。なんだこの展開。

「サンタの格好とかしちゃって、どしたん？」

男のほうが私を指している。私は一気に正気に戻ってしまった。

「え、あ、ああ、あの、バイトよ。バイト。うん」

おまけに頭の中も真っ白。

「そっか。大変だな。サンタの格好してゴミ出しなんてな。ま、頑張れよ」

「あ、うん」

ありがとも上手く言えないまま、彼らは去っていった。気が抜けて鼻水が垂れてきた。真っ赤なお鼻のトナカイさんは今日は笑われなかったけど、やっぱりサンタにはなれなかったようだ。真っ黒のゴミ袋の中に、いつの間にか雨水が溜まっていた。年末の大掃除にも使えなくなってしまったそれ自体、もはやゴミでしか無い。真っ黒な袋の中に入れていた水は電灯に照らされても真っ黒に見えてしまう。まるで暗い部屋に閉じこもる私みたいに。そのまま私は排水口に水を流して、その場に袋を捨てた。

Merry Christmas forme .

もういいでしょ？
もう一人の私。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452z/>

真っ黒なトナカイ

2011年12月29日16時52分発行